

叱言 たわごと 独り言

高橋義孝

新潮社

叱言たわごと独り言

昭和五十一年七月二十日発行

昭和五十一年八月二十日二刷

著者 高橋義孝

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社・東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 業務部〇三(266)五一二一

編集部〇三(266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 九八〇円

©Yoshitaka Takahashi. Printed in Japan 1976

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さる。送料小社負担にてお取替えます。

目

次

I

へい、毎度ありー……………	九	ブルン考……………	三三
自分の始末……………	一一	小学生の勉強机……………	三五
出入自在ホテル……………	一二	極端は相似るか……………	三六
ああ結婚披露宴……………	一四	ヒゲと民主主義……………	三八
嬰兒殺し……………	一六	虚礼礼賛……………	三九
「我もわれも」の落ち行く先は……………	一八	虚像と現実……………	四一
紐が解けかかっている感じ……………	一九	「八百長」問題……………	四三
インスタント・ラーメン人間……………	二一	嘘つき民族・日本人……………	四四
ああ国内線……………	二三	極端な実質主義と形式主義……………	四六
文明は危険……………	二五	面と線と点と……………	四八
四等客……………	二七	郵便番号を反省せよ……………	四九
井は必ずお戻し下さい……………	二八	郵政省からの手紙……………	五〇
あなたはどちら？……………	三〇	茲ニ些力東京ヲ論ズ……………	五二
難聴民族……………	三一	新聞の不思議……………	五六
		著作権の侵害……………	五八
		閑話休題「さう旨くは行か	

なごよ」…………… 六〇

II

これでいいのか国語の現状…………… 六三

私の訴状…………… 六五

耳ざわりな「お求めやすい」…………… 六七

「きょうは暑さ」…………… 六九

「おります」の誤用…………… 七一

「一応」と「享楽」と…………… 七三

愛称と「シャリ」…………… 七五

あたしたち芸者衆…………… 七六

下品な感じ…………… 七八

案外気にかけないこと…………… 八〇

口べた改良法…………… 八二

字を書く…………… 八四

私の「白鳥の歌」…………… 八五

ヨーロッパ偶感…………… 八七

左いちがい…………… 九〇

べらぼう…………… 九一

諦めの境地…………… 九三

閑話休題「どう」音一族…………… 九四

III

酒の年期…………… 九七

甘口の酒 辛口の酒…………… 九八

日本酒を見直す…………… 一〇一

日本酒と肴…………… 一〇二

日本酒は肴を見ない…………… 一〇五

酒のさかな…………… 一〇六

「食べ方通人」百閒先生…………… 一〇七

そば・すし・天ぷら・うなぎ…………… 一〇九

鍋もの論…………… 一一一

伊せ喜のどじょう鍋	一三
悟ったこと二つ	一四
昔の味忘れ得べき	一七
うまいもの	一九
昭和甲寅二月十一日	二三
駅弁道中	二四
うの目たかの目	二五
寄せては帰る卵焼	二七
くりよりうまい十三里	二九
好味抄	三〇
閑話休題 ケチや浪費以前の	
素寒貧	三二

IV

がらくた考	一三三
自然にたまる物	一三五

V

「役立たず」の大切さ	一三六
たまったカバン	一三八
洋服とネクタイ	一三九
ネクタイの教え	一四一
なくしたボタン	一四二
蝙蝠傘と国鉄ストライキ	一四五
スコットランドの陶器の魚	一四七
小鼓方異変	一四八
久慈の爪切り缺	一五〇
絵は持つものである	一五二
閑話休題 遊び	一五四

ミネルヴァの梟	一五七
書物は「つき合うもの」	一五九
風変りな愛読書論	一六一

読書は人相を変える	一六四
文学研究ということの胡散	

臭さ	一六五
----	-----

おぼろな過去から	一六七
----------	-----

私の放送裏ばなし	一六八
----------	-----

真剣勝負	一七一
------	-----

職人氣質	一七四
------	-----

稽古事の深い意味	一七八
----------	-----

能三題	一八二
-----	-----

西欧人と能狂言	一八七
---------	-----

相撲三題	一八九
------	-----

相撲の大入袋	一九四
--------	-----

句	一九六
---	-----

五月の節句	一九七
-------	-----

両国の川開き	二〇〇
--------	-----

夏祭のシーズン	二〇二
---------	-----

秋風や	二〇三
-----	-----

自分だけの歳末	二〇五
---------	-----

家庭にしかないもの	二〇六
-----------	-----

明治女のすわった性根	二〇九
------------	-----

江戸と東京	二一一
-------	-----

閑話休題 螢の宿	二一五
----------	-----

VI

老は漸く	二一七
------	-----

二重焦点の眼	二一九
--------	-----

コシ・こし・腰	二二一
---------	-----

浪々の身と鳥の糞	二二三
----------	-----

ある境界	二二六
------	-----

ひと言の魔力	二二九
--------	-----

御来迎	二三〇
-----	-----

寝覚めの想い	二三三
--------	-----

旧制高校時代の小さな事件	二三四
あんたは我が強すぎる	二三六
変る世なれや我ひとり	二三八
脱自然	二四一
老来嗜好の変遷について	二四三
過去と未来	二四五
結婚も一つの賭け	二四七
めでたいということ	二四九
年々歳々生相似たり	二五〇
二番目の福祿寿	二五二
二種類の生きがい	二五五
これはたまらん	二五六
後記	二五八

叱言たわごと独り言

I

へい、毎度ありー

始めから少々我儘をして、叱言を言わせていただく。

専門の仕事は別として、私はもう三十四、五年もの間新聞や雑誌にいろいろなことを書き散らかし、講演会などで下らぬおしゃべりをしてきた勘定になる。そういう経験を振り返ってみて、年来不可解にもまた不快にも思ってきたことが一つ二つある。

その一つは、公共の機関、官庁などで講演をした場合、謝礼をよこす時の先方の言い草に、まず大抵「何分にも役所でございまして予算が限られておりまして、些少で申訳ございません」という詫びともつかぬ断り文句がある。しかしこの断り文句は実ははなはだ理不尽なものなのである。早い話がそういう役所の人が宝石店へ出かけて、百万円の正札のついているダイヤモンドを買おうとして、（むろん役所が買うのであるが）「何分にも役所でございまして予算が限られておりますので、この百万円のダイヤモンドを五十万円にしていただきたいのです」と言っただけで済む。相手は「へい、へい、どうぞ」と言っただけで済む。

へい、毎度ありー

そんなことは絶対にないし、宝石店側は、予算が限られていようといまいと、それはこっちの知ったことじゃない、百万円の正札のついたダイヤモンドは百万円で買って貰うより仕方がないと言うことであろう。同じ理屈で、私の講演にも正札がついている。定価がある。むしろ商品の場合のように、はっきりいくらいくらということはないが、およその金額というものは極まっている。相手が役所だからと言ってダンピングするわけには行かない。私は役所に対してそんな慈悲心は持ち合わせてはいない。

講演の場合もそうだが、原稿依頼の場合も、日本には、礼金はいくらいくらと最初から言わない習慣がある。しかし原稿を書いて相手に売るのは明かな商行為なのに、これは売買の金額を伏せたままの商行為なのである。しかも買い手側で品物の値段を勝手に極めるわけである。

しかし多くの場合、四百字詰原稿用紙一枚に対していくらいくら支払うということは、依頼者側は言わない。しかもこれは、収入としてはちゃんと税金のかかってくる歴とした商行為なのである。こんなにかげた話があるであろうか。秘書のいる作家などは、秘書に事務的にその辺の交渉をさせるらしいが、私には秘書がないので、いつもこれで腹を立てる。そこで近頃は臆面もなく「一枚いくらですか」と聞くことにしている。すると大抵相手はびっくりして、「えーと、それは、その、いずれ編集長とも相談致しまして」などとへどもど答える。随分変な話だと思う。

そうかと思うと、「何々社ですが何月何日まで何とかというテーマで四百字詰五枚書いていただきたいのですが」というような電話のかかってくることもある。うちはそば屋じゃありませんよ。――

電話で腹の立つことがもう一つある。

原稿を書いたり、本を読んでいたりと最中に電話がかかってくる。電話口には私は出ないで、家人が出るようにしてあるから、家人が出て、御用件を承わりたい、私に取り次ぐからと云うと、ぜひ私に電話口に出て貰いたいというのだそう、私は仕事を中断して電話口に出ると、いつぞや何日にとお約束した原稿は当日取りに伺うからよろしくという。そんなことなら家人に云ってくればいいものをと腹が立つ。

私は年中下痢、腹で一日に何度も上^{じょうし}厠する。生憎便所の中で唸っている最中に電話がかかってきて、私にぜひ電話口にと云うのだそう、作業を中絶して、下腹の気分の悪さを我慢したい電話に出ると、「昨日は原稿ありがとう存じました」。こちらからかけるだけの電話器というものはないかしら。

自分の始末

ドイツから娘の友人のドイツ女性が日本へやってきたので、その人と娘と、私の知人二人をまじえてあるところで会食し、食事が終わってから、給仕女の差し出す勘定書を見て、私が支払いを済ませた。すると、ドイツ女性が隣にすわった私の娘の耳許^{みみもと}で何事か囁^{ささや}いている。あとで娘に、あの時あのドイツ女性は何と言ったのだと尋ねると「なぜ銘々が勘定を払わないで、あなたのお父さん一人が払ったのか」と聞いたのだそうである。外国では大抵の場合、銘々払

いが原則であるから、そのドイツ女性は私が一人で他の人たちの分をも払ったのを不審に思ったのである。

四人一組でゴルフをして、お昼に食堂で食事をしようとして給仕女をテーブルへ呼んだ。四人がそれぞれ註文を済ますと、給仕女が「伝票はご一緒ですね」と言った。私は「いや、銘々別にしてくれ」と答えた。ゴルフ場の勘定伝票などというものは各人別々が建て前であろう。それにも拘わらず、給仕女がそれが当たり前と言わんばかりの口ぶりで「伝票はご一緒ですね」と言ったのは、「伝票はご一緒」というのが当たり前のことになってゐるからであり、なぜそうなってしまったかという、接待ゴルフが圧倒的に多いからなのである。

つまりこれは何よりも雄辯に日本に個人主義がないことを物語っている。個人主義とは、自分の利益を守ることだけを考えるということではなくて、自分のことは自分で始末するという、簡単なことなのである。ところがわれわれは自分のことを自分で始末しようとしなくて、とかく他人に頼り他人におんぶしようとする。ドイツ女性との会食の時も、他の人たちが、どうせ私が勘定をするのだらうというような顔つきでいたので、もたもたするのはいやだからと思つて私が一人でさつさと勘定を済ませてしまったのである。

自分で自分の始末もできないで、何が民主主義か、ちゃんちゃら可笑しい。

出入自在ホテル

日本のホテルで最も不愉快なことは、ホテルの従業員、つまりメイドさんやボーイさんが、

こっちで呼びもしないのにやたらと部屋に入ってくるのである。先日もあるホテルで、朝のうち三度部屋に入ってきた。厳密に言えば四たびだったが、最初入ってきたのは朝食を運んできたのだから、これはやむを得ない。

二度目にノックされた時は、便器に腰をかけていたので、大声で「あとにして下さい」とどなった。五、六分経ってまたノックするので、ドアを開けると、朝食の食器類を下げてきたという。あとにすればいいものとは思ったが、何も言わずに置いた。三度目にノックされて、煩い^{うるさ}なと腹が立ったが、ドアを開けたら、冷水を容れたポットを取りにきたという。四たびめは男の従業員で、電気系統を調べにきたという。これは全部九時前のことである。

一度などあるホテルで、朝、やはり便器に腰をかけて唸っていると、誰かがノックする。この時も返事をせずにいたら、マスター・キーでドアを開けて部屋に入ってきた。浴室のドアは開け放しにしてあったので、私が「何だ」と叫んだのと、メイドさんが「あら失礼」と言ったのは同時だった。

またある時は風呂から出て、素裸で部屋の真中にぼんやり突立っていたら、誰かがノックする。この時も返事をせずにいたら、やはりマスター・キーを使ってメイドさんが侵入してきた。そして、丸裸の私を見るなり、「あらッ」と叫んで逃げて行った。帰りがけにフロントで、勘定のうちから見料の分だけ差引いてくれと言ってやろうかと思った。かのメイドさんは、私の減多に人に見せないものを見たからである。

ヨーロッパのホテルで、こちらから呼びもしないのにホテルの従業員が部屋に入ってきたということは、これまでにただの一度もなかった。日本人には、ノックするということの意味、また鍵をかけるということの意味が全然解っていないらしい。欧米風のドアを襖や障子と同じ

ように思っているであろう。つまりブライヴァシーの觀念がもととないのである。

しかし欧米風の居住様式の下では、欧米風に振舞って貰わなくては困る。逆に言えば、日本家屋の中へ靴を穿いたままずかずか入って来られては困るのと同じことである。

今では万事が次第に欧米風になつてきたが、しかし日本人の心性は以上の例でも解るように、全く昔のままなのだ。この不統一からいろいろな猿芝居的滑稽事こっけいじが生まれてくる。国鉄のグリーン車についている足載せ台は、この不統一が生み出した傑作であろう。汽車に乗るなり靴を脱ぐ人がいなかったら、ああいう工夫は凝らさなかつたことであろう。面倒臭い、どっちかにしてくれと私は腹が立つてならない。

ああ結婚披露宴

戦後、結婚披露宴の進め方が奇妙に定型化したように思う。そして私は、月並みということを描けばこういうことになるのではあるまいかという気がする。

まず専従の司会者が出る。この司会者たるや、客がしゃべっている時以外はのべつ幕なしにぺらぺらしゃべっている。うるさくて仕方がない。この役を買って出るのは大抵は新郎の友人であるらしいので、みなまだ若く、言葉遣いもろくに知らない人が多い。

それから例のエレクトーンの演奏である。鳴り物入りも結構だがあの機械的な音は神経にこたえる。

お次はウェディング・ケイキである。新郎新婦が手に手を執つてナイフを入れるあの儀式は